

第6回「現代と親鸞」公開シンポジウム

# 戦後歴史学と宗教研究

——教科書からこぼれおちたものを「民衆」・「宗教」からみる——

主催



真宗大谷派（東本願寺）  
親鸞仏教センター

## 服部之總の親鸞・蓮如論が問いかけるもの ——戦後日本宗教史研究の一断面——

近藤 俊太郎

本願寺史料研究所研究員

戦後親鸞論は服部之總『親鸞ノート』（国土社、1948年）にはじまる。講座派の論客として知られる服部は、絶対主義論や厳マニユ説などの仕事で著名だが、彼の親鸞・蓮如論もまた、後続の研究に大きな影響を及ぼした重要な成果である。

服部は真宗の大坊の長男として生を享け、後継者を期待されながらも、自身を「呪はれたる宗門の子」と評し、寺院と訣別し、マルクス主義歴史家として生きる道を選んだ。そしてマルクス主義の宗教批判の立場から、1930年代初頭には反宗教運動に参加してもいた。

『親鸞ノート』で服部は、三木清の絶筆「親鸞」との格闘を経て、戦時下で繰り返し説かれてきた護国思想的親鸞像を転回させ、農民とともにある親鸞という新たなイメージを打ち出していく。また『親鸞ノート』と同時期に刊行された『蓮如』（新地書房、1948年）では、蓮如とともにある農民に注目し、その一向一揆に向かう姿を活写しようと試みている。

敗戦直後の服部による親鸞・蓮如論には、戦時下の日本宗教史研究の国家主義的偏向を相対化し、戦後の思想的条件のもと新たな歴史像を結び直そうとする悪戦苦闘が刻み込まれている。親鸞や蓮如について論じることを通して、服部は戦後日本に何を訴えようとしたのだろうか。

本報告では、そうした服部の営為を手がかりとして、戦後歴史学と宗教研究の一断面に光を当ててみたい。

（こんどう・しゅんたろう）